

石川県石川郡鳥越村にみられる哺乳動物と 住民生活の自然史 ——左礫の人びと——

広 瀬 鎮 (名古屋学院大学)

ON THE LORES OF MAMMAL AND HUMAN LIVES IN TORIGOE VILLAGE, ISHIKAWA PREFECTURE

Shizumu HIROSE, *Nagoyagakuin University*

はじめに

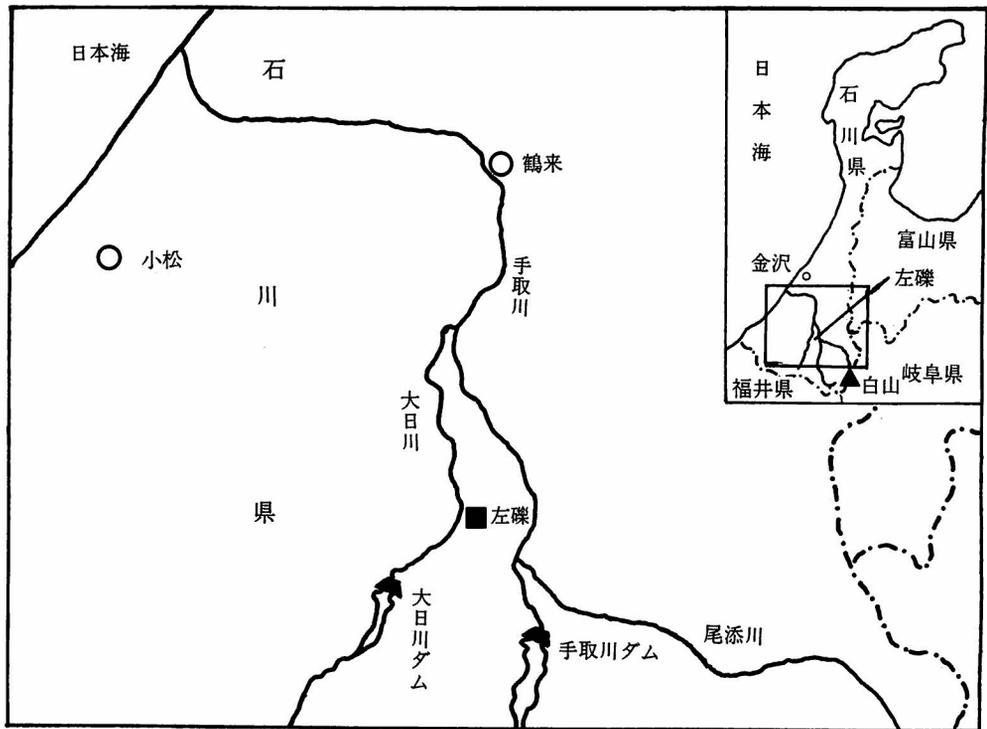
1985年12月8日、9年の間隔をおいての鳥越村左礫の道場において、中島芳雄氏、出口仁助氏、坂本健次氏他、道場奉仕者の婦人2名を交え、間取り調査を行なった。人びとの意識に昇ってくる野生動物も、1970年代末での間取りとは異なった動物が登場してきた。かつては、キツネをめぐる生息情報を多く耳にした(広瀬、1980)。ウサギ、キツネとが村人の口に登って、行政における鳥獣保護政策と係わった野生生物の消長が関心と呼んだものであったが、1985年末におけるインフォーマントたちの話題は、ムジナであった。ムジナが廃屋・空家へすみついたことは著しいものがあり、作害獣としての批判が集中していた。ムジナの正確な分布状況や、その生息数については、同地区では丹念に調査されておらず、実態はあきらかではない。しかし、年月をへて周辺の自然情報を聴取してみると、村内における野生生物の自然史にも人びとの生活同様に何等かの形の変化の現われてきたことが伺えるのである。同地区において野生生物が人びとの生活に係わった面での間取り調査は、今後野生動物を中心として各種動物をめぐる情報の収録を計画しているが、クマ撃ちや、その他小動物の駆除をめぐる、それ等動物への資源性認識には著しい変化が現われはじめている。

人々の話題となり伝えられる伝承も、動物に関しては、いぜんとしてニホンザルをめぐる話題が出現した。中宮でのサルとヒトの対立が伝わっていた。動物と人との係わりで動物の特殊な能力に期待をした、「牛によるキノコの毒見」に関する口承はきわめて特色のあるものである。牛が食べたら無毒茸、食べなかったら有毒茸と判定している。鳥越地区の人びとの生息地周辺にみられる哺乳動物は著しい小動物の資源価値の低下とともに、野生動物の捕獲への関心、動物知識等も著しく失われてきたと考えている。反面自然とのふれあいを望む気持ちが住民間に高まっている。

インフォーマントの自然認識

左礫での間取りは先述のごとく9年目である。今回の広川敏之氏宅での間取りには山本重孝氏、後に藤田喜作氏が加わった。対象とした情報提供者は、小沢勝氏、前川石松氏、広川敏之氏の3名であった。主題となるインフォーマントの幼年期の学校教育、とくに理科、生物についての記憶について多くを知ることができた。小沢勝氏は教職歴があり、学校教育に関しては強い関心もちづづけている。

現在左礫は、32戸であるが、1984年時65歳以上の高齢者で百寿会会員は男11名、女子16名であった。小沢勝氏の小学期は大正末期であり、前川石松氏の小学期は明治期のおわりであり、学校教育の



左礫周辺図

整備段階に著しい差が両者の間に存在している。だが、いずれもが自然の恵み、豊かなうましき里としての鳥越の自然に愛着を抱いてきた人々たちである。

明治の教育の近代化と鳥越の人びとに関し、鳥越村史(教育)がふれているが幸い本調査においてインフォーマントとしても学校教育関係者の協力を得た。戦前、戦後の教育の特色など、別論にて明らかにする。インフォーマントへの質問の内容は、①野生との出会い、②子供の頃の学校体験、③遊びと自然接触、④成人として係わる村内行事と自然、⑤今でも覚えている特殊な環境、⑥今日でも役立っている学校で学んだ知識・技術、⑦特に好きであった科目、⑧知っている動物・植物他、⑨何を若い世代に伝えたいか。⑩今、何が不自由であり、そして何が不自然であると思うか。等であった。

左礫の動物の今話し

昭和60年12月の聞き取りでは、インフォーマントの関心は、ムジナの出現に集中していたが左礫道場での3名のインフォーマントは、1匹ザルの発見、クマ撃ちとその追跡、ウサギの捕獲などをめぐる情報の提供があった。もっとも、これらは狩猟專業者からのものとなつて間接的情報も含まれている。

ウサギの集団捕獲の記憶や、バイウチは極めて印象にのこることとして話題にのぼった。

とくにニホンザル薬用をめぐる、あらたに、サル頭の黒煙き以上の特効薬として「コウタイシ」と呼ばれるサルの胎児の薬用使用についての伝承を収録しえた。このサルの胎児は、万能薬として知られていた。なお、左礫において、カラスの鳴き声が不吉を告げる伝承が依然として残留していた。



写真1 左礫に暮らす人との対話（左 山本重孝氏）

また、左礫では、家畜の牛にキノコ（茸）の毒味をさせているということであるが、これは、ウシのもつ有毒物質の弁別能力を利用したものとして注目される。今後この伝承に関する科学的な調査を試みたいと考えている。

なお、9年前に聴取した、同地区におけるかつてのニホンザルの捕獲の伝承が、今日なお、消え去ることなく継承されていた。そして、さらに、あらたに他地区における犬とサルとの対立の話が、同地域内にもちこまれていた。

現在、ほとんど見ることもないニホンザルについては、このような形で民間伝承が継承されているところから、左礫の動物今話しは住民による関心のもたれ方如何によって長く維持されるものであることがわかったのである。

左礫にみられた学校教育の昔

インフォーマントは、70歳をこえる方々であったが、少年期の学校生活についての鮮明な記憶を保持していた。鳥越村の教育についての歴史的背景は、鳥越村史にくわしい。地域社会における住民教育は、我国の近代化以後の中央の教育制度に深く係わっているが、江戸期の教育に関しては、“山方村々は文盲度高く百姓たちは、百姓に学問は不必要なものとして敬遠されていた”とされているのであるが、だが、今度の調査で、鳥越地区の一部村落においては、生活が豊かで、すなわち、田畠を有する住民の子弟たちの方が、かえって勉強をしなかったことが明らかとなってきた。貧農家庭ほど、奉公にでる上での知識や技術を身につけようとしてよく学んだという。教育というものの受容者の体質については、さらに深くつっこんで研究調査が必要となってきたと考える。だが、インフォーマントの



写真2 左礫道場

いずれもが、江戸期同様に、“読み、書き、ソロバン（算術）”をもっとも重視していた点は顕著なことであるといえよう。理科や歴史などという教科科目は、直接日々の生活に役立つものとして評価されていなかった。このことは、住民層における科学教育の不活発性をもたらせることになったものと考えられる。江戸期における「農民鑑」こそが、百姓間に講読され、鳥越村における特色のある教育実践であったことが明らかとなっているが、農民層にとっては、農作に係わる学問は重要であったと考えている。

教育の近代化の進展と共に教育の諸制度の発展充実は著しいのであるが、インフォーマントの体験した明治末期、および、大正初期における印象に残っている教育者や教科、教材でみる限り、「理科」は、大きな学習領域とはなっていない。地方に則応した教育が実施されることよりも以前に、文部省教科書に沿った教育プログラムが推進されたのである。したがって、教科書を離れ、創造教育の場を展開する教育者像を見出すことは、現時点ではなかったのであるが、学校教育の受容者側である子供たちは、多くは学校から戻り、学校教育から解放されるや野外においての学校外体験に特色ある遊びを中心とした生活体験を維持していたのである。

今日の学校教育への期待、要望をふくめたインフォーマントたちの教育観は、きわめて現行教育への意見が多く存在し、学校教育へのあるべき姿への高齢者の抱く心情がより明らかとなってきている。明治末期および、大正初期に小学期を送ったインフォーマントたちは、学校からの下校後、村の多くの子供たちが、ウマの世話、草苅りに出かけるのが常であったこと、また、自からが使用するワラジを日曜日などを利用して年間100足ほど作っていた、と云う（石川県立郷土資料館、1973）。そして、現代の子供たちに必要なものは、教室外の遊びであるというのが、インフォーマントたちの願いともなっていたのである。

聞き取り口承の考察

左礫における1985年調査によって収録しえた聞き取り情報のうち、自然知識に係わったインフォーマントの少年期の学校教育体験は、今後の鳥越地域における自然教育の具体的な形態を知る上での手掛りとなるものである。1978年左礫調査の折りに抱いたのは、地区内住民における信仰生活そのものの関心ではあった。八幡社、白山社の多い鳥越地区は、かつての焼畑農耕生活に係わる農耕神とも考えられるそれら神社信仰に加えて仏教に深く係わった生活がいとなまれている。これら住民の自然観や生活における自然環境の認識は、信仰と無関係ではありえない。環境認識は、基本的には、歴史的環境に大きく係わって形成されるが、同時に他村情報への関心の高さ、環境の文化的推移についての関心は共々にきわめて高いことが明らかとなってきたのである。

野生動物を中心とした聞き取りは、いまだ着手されたばかりではあるが、左礫広川敏之氏宅でのインフォーマントの口述には、カラスに関する云い伝えが、今日なお継承されていたことに注目したい。不吉の前兆とされるカラスの鳴き声であるが、このカラスの鳴き声が明らかに近年変ってきたこと、カラスの人への接近が著しくなったことがあげられている。人なつっこくなったカラスの行動を変化として認めているのである。このように、生物の具体的な変化に気づいたインフォーマントたちは、当然のこのように、現在を直視していて、今日のような型にはめようとするこの強い教育への疑問も話題となってきていた。高齢者であるインフォーマントの現代社会へのメッセージは、“すべて自然のままに”という言葉につきていてと考えている。

おわりに

鳥越村でのインフォーマント6名を囲んでの聞き取りを通じて、人びとが身の周りの自然をどのような関心でみているか、住民住環境に現われて話題となる自然とはどのようなものであるか、本調査は、聞き取り情報のごく一部分をとりあげて考察したものすぎない。

高齢者間にみられる鳥越村の自然環境の変化に関する関心度はきわめて高いものがあり、注意深く自然の把握を行なっていることが伺える。アンケートによる鳥越村の自然変化をめぐる住民の認識動態は、いまだ集録がおわっていないのであるが、今回の左礫における口承収録でみる限り、地域住民であるインフォーマントの環境の変化についての関心は高い。住民にとっての自然を知る学習は、家庭教育や社会教育、ならびに行政施策と深くむすびついていることが予見できたのである。すでに、刊行されている鳥越村史は、貴重な村民生活の史的記録資料であり、その値は高い。

地域に生まれ、育った人びとの心の記録には、いまだ十分に迫りえないのであるが、本編は、鳥越地区の「今話し」に民俗研究の立場からの分析をさらに加えて行きたいと考えている。山に高尾山、川に大日川、社に武建社、物産に雉他と左礫の過去をえがき出した古文書をひもどきながらも、今日の左礫の人びとの心に迫りたいと考えている。

本論は、石川県白山自然保護センター調査研究費の支援をえた。ここに深く感謝申しあげる。また鳥越村教育委員会、藤田喜作教育長、吉野谷村山本重孝氏、そして左礫、中嶋芳雄、出口仁助、坂本健次、広川敏之、前川石松、小沢勝の諸氏には聞き取りに当り格別な御協力と御教示をえた。厚く御礼を申しあげる次第である。

参 考 文 献

- 広瀬 鎮 (1976), 石川県石川郡河内村内尾によられたニホンザル伝承と白山山麓地域における住民の自然認識と民村伝承比較調査の成立 石川県白山自然保護センター研究報告, 第3巻石川県白山自然保護センター
- (1978), ニホンザル伝承分析よりみた白山麓住民の自然観の特色, 文部省環境科学研究報告, 日本モンキーセンター
- (1979), 猿・法政大学出版局
- (1979), 犀川上流二又, 倉谷地区にみられたニホンザル伝承の特色, 白山自然保護センター研究報告第5集, 石川県白山自然保護センター
- (1984), 白山麓石川県石川郡白峰村におけるニホンザルの民俗伝承の考察, 石川県白山自然保護センター研究報告第10集, 石川県白山自然保護センター
- 石川県立郷土資料館 (1972), 白山山麓地域民俗資料緊急調査報告,
- 岩田憲二 (1980), 山に生きる一山作り生活を訪ねて はくさん第8巻第2号 石川県白山自然保護センター
- 尾口村史編集委員会 (1978), 尾口村史・尾口村
- 篠田直弘 (1985) 美濃徳山村通信 徳山ミニ学会
- 白峰村史編集委員会 (1959, 1962) 白峰村史上下・白峰村
- 徳山村ミニ学会事務局・「徳山村—その自然と歴史と文化」
- 鳥越村史編集委員会 (1959, 1962), 鳥越村史・鳥越村

Summary

Author collected informations about animal lores which were formed between man and animal in Torigoe Village, Ishikawa Prefecture.

In 1985, the author interviewed villagers about their regional life in Hidaritsubute district of Torigoe Village.

Recently the author got daily informations about fox, rabbit and other wild animals, and found ecological changes in their remarkable behaviours. Developement of extraordinary change of animal values in the wild became very easy now compared with other regions.

The traditional means for finding poisonous mushroom by animal is very important. It was now clarified that historical nature educations have been kept in the region under the daily practical home and school program of nature contacts.

The author recognized the relationship between nature and children in modernized village zone and also has found that the present nature education programs of Educational Administration has some limits in real regional environment and seasons in Japan.